不登校児童・生徒支援事例報告書

# 不登校生徒の別室登校への支援について

## 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、何事に取り組むのにも無気力で、不登校の状態が続いている。自己肯定感の低さもあり、友人への適切な距離感が分からず、相手が不快になる言動もあるため、トラブルを起こしてしまう。また学力、理解力の低さもあるため、学校の諸活動を十分に理解して取り組めていない。結果、当該生徒は教室への登校が難しくなり別室登校となった。

## 具体的な取組

月２回「不登校防止対策委員会」を実施し、SSW、不登校担当加配教員、特別支援教育支援員を交えて不登校生徒の登校状況、対応状況を確認している。毎週の企画委員会で不登校生徒の情報共有を行っている。一人に負担を掛けるのではなく、学校全体で見守る体制をつくり組織として対応している。

ＱＵ調査を１学期に実施した。結果を分析し、各生徒にとって満足度の高い学級となっているか、また、満足のいく学校生活を送れているかを確認した。支援が必要な生徒への対応を考え、不登校を未然に防止できるよう努めた。さらに生活の悩みアンケート調査を学期毎、臨時を含め５回程度実施し、学校生活や人間関係の不安の早期発見・対応を行っている。

通年を通して不登校生徒に向けて、オンラインを活用した、授業・行事の配信を行っている。別室登校の生徒も視聴できるようにタブレットＰＣを活用している。校内の別室において、オンラインによる授業を視聴できる環境を作り学習に取り組んでいる。

自己肯定感が低く自信がもてない生徒に寄り添った校内別室への登校支援を心掛けた。スモールステップの指導を行い、生徒のペースに合わせ悩みを聞き出すことから始め、登校時間の延長、給食への参加など、当該生徒と学年の教員がコミュニケーションを取りながらできる事を増やした。

## 成果

それぞれの不登校の要因に対して個別に対応を継続して、生徒個々に寄り添った対応を続けた結果、全体では別室登校の生徒が増え、個々の生徒も学校に対する意識や登校しようとする気持ちの変化が見られている。

## 課題

加配教員の終了に向けての組織づくりは行ってきたが、丁寧な別室対応は人数増に依存していたと思われる。加配終了後も別室登校している生徒への丁寧な支援のため、組織的に対応していく必要がある。

不登校児童・生徒支援事例報告書

# 不登校生徒に対する別室登校までのアプローチについて

## 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、第１学年の３学期から不登校傾向となり、自宅からほとんど外出することができない生活となった。今年度、第２学年になってからは、SSW、不登校加配担当、学生ボランティア等が家庭訪問を行い、学校とのつながりを築けた。

## 具体的な取組

SSW、学級担任、不登校対応加配教員で連携を取りながら定期的（週２回程度）に家庭訪問を繰り返す。行事の話などで当該生徒の気持ちを学校に向けようとした。ストレスにならないようコミュニケーションを取り続け、今後の展望についても話題に出し、まずは通学路をSSW とともに歩いてみることにした。

別室登校用教室として、もともと生徒会室となっていた部屋を改装した。不登校生徒が行ってみたいと思える空間になるよう学校の全教職員で協力し、整備した。個別の学習スペース、グループでのコミュニケーションスペース、リラックススペースに水やりのできる農園、学校図書館、特別支援教室などを一体化したエリアに設定し、登校時に他の生徒との接触がない入口も設置した。

新しく整備した教室の内装や設備を写真に撮り、学校の正門から別室登校用の教室への道のりを動画にしたものを不登校生徒に見せて、自分自身が登校をする際のイメージができるようにした。

＜別室登校用の教室＞

別室登校をした際に、個々に適した対応ができるようオンライン授業の環境やブルーレイの設備、カードゲームやアプリの導入などにより、生徒が自分で過ごし方を選択できるような教室作りを行った。別室登校をした生徒が最も興味を示すのはカードゲームで、気持ちを和らげるために、毎回初めにカードゲームを行っている。

## 成果

２学期の中頃から、学校の門の前まで SSW と家から歩き、登校をイメージするところからスタートした。それを複数回繰り返し、門をくぐり、別室までたどり着き、30 分過ごすことができた。今では１時間談話や読書、カードゲーム、農園の水やりなどで過ごし、給食を食べることもできている。

## 課題

現在は、週に数日登校できている。学校にさらに慣れていけるよう、登校刺激を様々な形でアプローチを行い、生徒の登校意欲を向上させていく。